

守

破

対談

創

19世紀には「小さなオーケストラ」と呼ばれたギター。若くしてプロデビュー後、ワールドワイドに活躍している村治佳織氏と、ギターをこよなく愛する鈴木人司審議委員が、楽器の魅力や音楽に取り組む姿勢を語り合う。その考え方や生き方から人生を豊かにするポイントが浮かび上がった。



日本銀行政策委員会 審議委員

鈴木人司

Hitoshi Suzuki

1954年東京都生まれ。77年慶應義塾大学経済学部卒業後、(株)三菱銀行に入行。2002年(株)東京三菱銀行市場企画室長、06年(株)三菱東京UFJ銀行執行役員市場企画部長兼本店東京ビル出張所長を経て、常務取締役、専務取締役、副頭取、顧問などを歴任。17年7月より日本銀行政策委員会審議委員。

出会いと発見を通じて 人生を豊かに楽しもう



クラシックギタリスト

村治佳織

Kaori Muraji

1978年東京都生まれ。92年ブローウェル国際ギターコンクール及び東京国際ギターコンクールで優勝。93年にCDデビュー。その後、出光音楽賞、村松賞、ホテルオークラ音楽賞を受賞。2003年英国の名門クラシックレーベルDECCAと日本人初のインターナショナル長期専属契約を結ぶ。以後、日本を代表するクラシックギタリストの一人として活躍している。

ギターとの出会い

鈴木 村治さんは台東区のお生まれで、私は隣の荒川区の生まれです。小さい頃の思い出をお聞かせいただければと思います。

村治 活発な子どもでした。ギタリストだった父の影響でギターを始めましたが、演奏することは好きでしたし、本を読むのも好きでした。

ギターを弾くことは、日常生活の一部でしたので、お風呂に入ったり食事をしたりすると同じような感覚で、楽器を弾く時間がありました。好きだとか嫌いだとか考える前に、そこにギターがあるから弾くというような感覚でした。

鈴木 中学・高校のとき、クラブ活動はしていましたか。

村治 帰宅部でした。子どもの頃は父がギターの先生でしたが、中学・高校のときは他の先生にもついていて、いろいろな曲を勉強しました。学校には普通に通い、夕方に帰ってきてから、練習を二、三時間するのが日課でした。



私の場合、自分が意識する前にギターがあつたのですが、鈴木委員は、ご自身の意思でギターに惹かれて始められたのでしょうか。

鈴木 一三歳の頃に、母親を亡くしました。その寂しさから、家の近くの楽器屋さんでギターを買って弾くようになりました。学校にはギター部がなかったので、東京音楽アカデミーという通信教育制のギター講座を受講し、毎月送られてくる楽譜とソノシート（ビニールなどで作られた薄手の柔らかいレコード）を使って練習しました。高

校生になってまたひとつギターを買い、大学でも続けました。大学を卒業し、今の三菱UFJ銀行に入った際には、接客業でもある銀行では爪を伸ばしてはいけないと言われたので、一時中断することとなりましたが、二〇〇二年にロンドン赴任から帰ってきてから再開することにしまして、先生についてレッスンするようになりました。今はプロのクラシックギタリストとして幅広く活動されている川井善晴さんに教えていただいています。

村治 独学で学ばれたとはすごいですね。自分とは違う環境なので、ご自身の意思で始められた方をうらやましく思います。

鈴木 大ギタリストのアンドレス・セゴビアは九四歳で亡くなりましたが、晩年期までコンサートを開いていました。楽器は高齢になっても弾けるし、ぼけの防止にもなりますよね。特にギターは右手と左手で違うことをしますから、頭を使わなければならない。

村治 どんな楽器も難しいと思

いますが、ギターは特に指の動きが細かいですよ。

鈴木 バイオリンはフレット（弦を指で押さえる部分に埋め込んである金属の横棒）がないけれども、弦を一本ずつ弾いていることが多いですね。

村治 しかもバイオリンは右手に弓を持って弾きますが、ギターの場合は指を一本ずつ動かします。

鈴木（ギターを弾くまねをして）こうやって左手で弦を押さえるので、一般的に左手のほうが指が長くなりますよね。私もそうなっています。

村治 かなり違いますね。（指をのばして）私も同じく左右で指の長さが違います。

新たな挑戦

鈴木 ところで、村治さんは、二〇一六年、五年ぶりの録音となるアルバム「ラプソディー・ジャパン」を出され、私も愛聴しています。このアルバムは「ふるさと」がテーマということですが、どのような思いが込められているのですか。

村治 私は東京育ちなので、ずっとふるさとはないのかなと思っていました。「ふるさと」に描かれている山とか川は田舎に行かないと見られないという意識でいたのですが、数年休養した後久しぶりにステージで演奏できたとき、自然と「第二の家」に帰ってきました」という言葉が自分の口から出ました。生まれ育った場所だけではなく、その後長い時間を過ごした大切な場所も「ふるさと」と解釈しているのではないかと思います。

大切に思う場所があるということ、とても大きなことだと思います。一方で、東日本大震災で被災された方たちのように、生まれ育った場所を大切に思う気持ちも良く分かります。こうした思いは、どこか一致する部分があるのではないかなと思います。

このCDが生まれるきっかけは、東日本大震災の被災地の皆さまのためのチャリティーコンサートでした。そのコンサート



で弾いた曲を全てCDに録音するので、当初はタイトルも「ふるさと」にしようかとも思ったほどでしたが、世界に向けて発売するという事で、「ラプソディー・ジャパン」というタイトルを選びました。

鈴木 アルバムには村治さんご自身が作曲された作品が四曲ありますが、作曲は以前から手がけていたのですか。

村治 いえ、以前は全く興味がありませんでした。演奏のみで、書かれた譜面をどのように解釈するかで十分満足していました。

鈴木 作曲をしようと思ったきっかけは、どのようなことがあったのでしょうか。

村治 二〇一二年にアフリカを

訪れたのがきっかけです。NHKの「旅のチカラ」という番組があり、その番組は、出演者が好きな場所に行つて何か新しい経験を一つするという内容でした。音楽活動でなかなか行けない場所はどこだろうと考えて、アフリカに行つてみたいと思ひ、その時の新しい経験として作曲をしました。それまで、作曲はしたことがなかったので、

鈴木 旅がきっかけだったので、すね。「島の記憶」という作品は、副題が「五島列島にて」です。これも旅がきっかけですか。

村治 そうです。日記を書くようにメロディーを書くということが楽しかったので、その後、五島列島に行つたときも、教会を見たときの厳かな気持ちを曲にしたためたり、詩に音楽をつけたりました。そうしてできあがった曲の中から四曲をアルバムに収録しました。

鈴木 これからも作曲は続けていくのでしょうか。

村治 皆さんに、いい曲だなと思つていただけて、機会があれば

ば作曲したいと思います。

鈴木 実は、私も高校生のとき、第二校歌を制定するという機会があり、応募しました。

村治 それは学校の課題だったのですか。

鈴木 いえ、有志が手を挙げて自分たちでつくる形でした。残念ながら、採用されませんでしたけれどもね(笑)。

**ギターという楽器は
とても奥が深い**

鈴木 ギターという楽器についてお話をしたいと思ひます。私は、最初に近所で買った後、お

小遣いをためて手工ギターを買つたのが本格的なギターとの出会いで、練習を再開した後に欧州の製作者のものを中心に楽器を求めてきました。村治さんは、ホセ・ルイス・ロマニリオス製作のトルナボス(サウンドホール内につけられた木製の円筒)つきの楽器を弾いていましたが、最近、テレビで拝見したときはポール・ジェイコブソンをお使いでした。これは以前使つていた楽器かなと思つたの

ですが。

村治 そうです。デビュー当時に弾いていた楽器です。

鈴木 村治さんの楽器の遍歴はどのような感じでしょうか。

村治 バイオリンと比べると、ギターは求めやすいお値段なので、いろいろと手元に置いて、この曲にはどのギターが合うだろうかと、今度はこれを弾いてみたいという具合に、楽器の変化を楽しめるのがおもしろいですよね。

鈴木 ロマニリオスとジェイコブソンは出てくる音が大分違いますよね。

村治 違いますね。ジェイコブソンは音量がパワフルだったので、東京国際ギターコンクールに出るときに、当時習つていた福田進一先生が勧めてくださいようになりました。その後、もう少し深みのある音を出したいなと思ひようになりました。別の楽器にしました。でも、不思議なことに、一〇年以上使わなかったジェイコブソンを、四、五年前に弾いたら、ものすごくいい音なんです。以前よりも深み

が出たような感じがしました。人と同じなのかもしれないですけども、たとえずっと弾き込まれていたわけではなくても、時がたつと少しずつ変わるのでしょうか。それで、最近また使っています。

鈴木 ロマニリヨスは、私も持っています。低音が結構太くて、それでいて高音は軽やかに叙情的な味があると感じます。ロマニリヨスの音のどの辺がお好きですか。

村治 今おっしゃったとおりで、低音がちゃんと支えて、高音も細くはなく、輝きのある音です。響きのバランスがよく、どんなジャンルの音楽でもつくりやすいです。例えばスペインのギターは、スペインの作品には合うけれども、ドイツのバッハには味が少し濃過ぎるかなという音色のものもありますよね。でも、ロマニリヨスは気品もあるのでバッハにも対応できて、ホアキン・ロドリーゴ、イサーク・アルベニスなどのスペインの作曲家の作品にも合う、オールマイティーなギターだなと思

います。

鈴木 テレビで拝見した際、トルナボスときの楽器をオーダーされるときに、「ネックを少し細めに」とおっしゃっていた記憶があるのですが、結果的に何ミリぐらい細くなったのですか。

村治 それが細くならなかったんです（笑）。実は、トルナボスも、お願いしたわけではなくて、でき上がってきたらついていていたのです。

ロマニリヨスさんにもお会いしましたけれども、演奏家に寄り添うよりも、製作家としてのプライドがすごくあって、「演奏するよりつくるほうが難しいかもしれない」と、にやつとしながら言われました。そのくらいの気概を持ってつくられているから、芯がある響きを備えた楽器になるのだと思います。

鈴木 ロマニリヨスさんは、ご自分でギターを弾くのですか。

村治 ほとんど弾かないです。**鈴木** 実は、パウリーノ・ベルナベさんの工房を訪ねたことがあるのですが、ベルナベさんもあまり弾けない感じでした。

村治 不思議ですね。製作家の方で達者に演奏する方はあまりいらっしやらないですよ。

鈴木 でも、とてもフランクな人で、工房に何うと、「どれでもいいから好きなように弾きなさい」と言われて、横のほうのスペースで弾かせてくれたりしました。

緊張をいかにしてコントロールしていくか

鈴木 村治さんはお父様がギターリストで、三歳からギターを始められていますが、以前テレビ番組で、「食事をやめようと思うことがないように、ギターをやめたいと思ったことはない」とお話しされていました。ギターを続けられる中で、時には好きではなくなってしまうことはなかったのでしょうか。

村治 それはなかったです。けれども、早くからデビューして大人の皆さんとお仕事をしていたので、楽しむというよりも、しっかりやらなきゃみたいな気持ちが入り込んで強かったですね。それが強過ぎて、コンサート一



© Takashi Okamoto

つ一つも、楽しむよりも、毎回「頑張ろう」とこなしている感じが何十年も続けていくと、いずれ自分が苦しくなるんじゃないかなど徐々に思い、その後は「いかに楽しめるか」をこつこつと自分なりに追求していくようになりまし。

鈴木 私は元銀行員で、プレッシャーのかかる場面もありましたが、仕事をやるうちに、徐々に緊張しないようになりまし。しかし、趣味でやっているギターでは、発表コンサートがあると、とても緊張することがあります。

村治さんはプロとして大成されているのでコントロールでき

ていると思いますが、コンサートですごく緊張して大変だったということがありますか。

村治 小さいころから弾いているので、頭が真っ白になるとか、手が震えるとか、冷や汗をかくということは今までなかったです。ただ、緊張すると少し硬くなるので、練習のときには滑らかに動けていたものが、自分の中で少し動きが硬いな、となる感じがありました。

鈴木 ギターは左右の手の動きが客席からよく見えます。私が見られていると気になって体が動かなくなることがあります。

村治 リハーサルをしっかりとやっている、「これだけやったのだから、なるようにしかならない」と思えるようになりますよ。

鈴木 先日、演奏会に参加したのですが、そこでスタンリー・マイヤーズの「カヴァティーナ」とレオ・ブローウエルの「11月のある日」の二曲を弾き、一目がスムーズに弾けたので、何とかなるぞと考えながら弾いていたら、途中で先が分からなくな

ってしまいました……。

村治 分かります。ステージの上には魔物がすんでいるんです。

この前、ビリヤードの選手の方とお話をさせていただきましたが、ビリヤードもギターの演奏と少し似たものがあるかなと思いました。相手に心を読まれたりするから、落ちついて、表情にも出してはいけないのだそうです。だから、普段からメンタルを鍛えることが大事だと。私にとっては、音楽家以外のジャンルの人と話すことがすごくいい刺激になります。

先程、お仕事のときは緊張されないといわれましたが、その秘訣は何でしょうか。

鈴木 例えば数十人が集まっている会議でプレゼンをするとか、緊張が生じそうな場面でも、早い段階からそういう経験を積んでいくと、だんだん大丈夫になります。もちろん緊張はしているのですが、ちゃんと自分をコントロールできるようにするのでしよう。

村治 そこは演奏も一緒です

ね。いかに自分をコントロールするかが大事です。私は、「試練は、乗り越えられる者にしか与えられない」という言葉が好きです。何か困難に直面した時には、いつも思い出します。

かけがえのない出会いと 人生の豊かな楽しみ

鈴木 しばらく前までは、年に数カ月間、スペインにおられたのですよね。

村治 スペインには、年に三カ月ぐらい滞在するという生活を四年間繰り返し返しました。あときは楽しかったですね。

鈴木 私はロンドンに四年間勤務しましたが、スペイン人の部

下がマドリッドで働いていたおかげで、年に最低一回はスペインに行けましたし、旅行もしました。

村治 ロンドンからスペインに行くとき、何かほっとしませんか。

鈴木 スペインでは夕方近くになると、道端に置いてあるテーブルの上に夕日に当たって少し溶けたような生ハムが載っていたりして、それを食べながら白ワインなんかも飲んでいたり、すごくのどかで、豊かな国だなという感じがします。

村治 私も訪れるまでは、ここまでスペインが好きになるとは思わなかったです。留学はパリ



©Takashi Okamoto



でしたので、マドリードは最先端の街とは少し違うんだろかなと思っていたんです。けれども、行ってみると、時間の流れはゆったりとしていておおらかですし、それこそ人生を楽しもうという気になれるような感じで、すごく影響を受けました。

鈴木 そのスペインで村治さんは、亡くなる少し前の作曲家ロドリゴさんにもお会いになっています。それは、人生の中ですが、振り返ってみていかがですか。

村治 クラシック音楽の場合、演奏している曲の作曲者はほと

んど天国に召された方なので、楽譜と自分の対話という感じになります。しかし、ロドリゴさんとお会いして、どんな名作も、やっぱり人が創ったもののだなと実感しました。もちろん、今までもそれは分かっていたかもしれませんが、しっかりとそのことを心で感じる事ができました。その時、ロドリゴさんは九七歳でいらっしゃいましたけれども、その人にしかない人生があつて、その中の大切な時間で曲を書かれていて。演奏家は、作曲者の気持ちを代弁したり、推しはかつて表現することが大事だと教わってきましたが、そのことをあらためて感じました。一方で、その出会いを契機に、自分の人生も大事にしようと思うようになりました。

自分のことでさえも全て分かるわけではないのに、その曲を書いた方のことを分かったと思うのはおこがましいので、そのあたりはバランスよく、分かるところまではしっかり学んで、あとは日々の自分の暮らしを大事にしようと思いました。ロド

リーゴさん自身、そういう方なんでしょうね。家族に囲まれて、大変なことに遭遇しながらも、人生を一生懸命生きておられた方です。本で読んでも感じとれるのかもしれないですが、自分が一瞬でもお会いできたことで、後々まで心に残るものが多く得られました。

鈴木 村治さんが以前どこかで、「日常の中で小さな偶然を見つけることが趣味の一つ」と話していたのが印象に残っています。旅やロドリゴさんとの出会いは、人生における偶然の一つということですね。

村治 小さな偶然を見つけることが好きになったきっかけは、人との出会いは不思議だなと思うようになったことですね。デビューしてどんどん会う人の数が増えて、自分が想像する以上の何かが起きて、出合いや再会があり、自分の思い以外の不思議な何かがあるんだと思うようになりました。

そんな中から、例えば、読みたいなど思っていた本を図書館でほかの人が読んでいるのを目

にするとか、そんな小さなことでもいいのですが、それはきつと神様からの「日常を楽しみなさい」というプレゼントなのだと思いますよ。

鈴木 私も、「日は好日いちじょうじつ」や「一期一会いちごころいちごころ」、「莫莫想まくもくそう」や「一隅いちぐくを照らす」といった、一日一日を大切に、いろいろな感動を探すという言葉が好きなので、村治さんのお考えに通じるものを感じます。

村治 旅は予想もしないことが起きます。始まりがあつたら終わりがあり、人生のようなものだなとも感じます。だから、旅をしているような感じで日常を過ごせば、より刺激的に豊かに過ごせるかなと思っています。もちろん、さまざまな出会いも大切にしたいです。

鈴木 こうやってお会いする事ができてよかったです。

村治 今年は新しいアルバムを制作する予定があり、曲も決まっています、どんなふうアレンジするか相談中です。

鈴木 楽しみにしています。本日はありがとうございました。